

フランス高等教育の変遷 大学と学部を中心として 一

著者	向井 一夫
雑誌名	生活の科学
号	8
ページ	77-93
発行年	1986
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00003251/

フランス高等教育の変遷

ー大学と学部を中心としてー

向 井 一 夫

はじめに

大学という制度は、今日その転換を大きくせまられながらも、800年近く存在しつづけたものである。それはヨーロッパにおいては、議会制度と並んで古い歴史を有する制度である。中世ヨーロッパにその源を発した大学制度は、近世、近代から現代へというスペクトルの中で各々の時代の社会的変化に対応しながら内的構造を変化させてきた。今日の大学を中世ヨーロッパのそれと較べるとき、その特質は著しく変化してきているが、ある点では中世以来の同一のパターンを継承しているとみなすこともできる。

中世以来の大学の長い歴史には大きく三つのクライマックスがあったと考えられる。それは、1)大学の創始期である中世、2)ベルリン大学の創設を代表とする近代的大学の発足期、3)アメリカ的大学 (the American University) の誕生の時期の三段階であった。

大学史上の最初の形態は、中世ヨーロッパのそれである。中世大学は、当時蔓延した団体形成原理の影響をうけ、教師と学生との教育・研究のための共同体、いわば学問のギルドとして成立した。中世以前においても、たとえば古代ギリシア・ローマを通じてプラトンのリュケイオン、アリストテレスのアカデミア、あるいはアレクサンドリアのムウセイオン、ローマのアテネウム等の諸学問機関が存在していた。しかし、それらは一時的なものであり、永続的な学問機関と呼ばれるほどには組織化されていたものではなかった。また「学部やカレッジ組織、学科課程に代表される教育のすべての機構や試験、卒業式、学位等の制度」¹⁾などの今日最も大学に関してなじみ深い諸々の特徴は中世の産物であるという点からも大学の起源は中世に求め得るべきであろう。

パリ、ボロニア、サレルノに代表される中世の大学は、17・18世紀のハレ大学、ゲッティンゲン大学という近代的大学の嚆矢とされる大学においてその性格を大きく変えられた。両大学は、近代的科学が「自由」の原理に立脚して研究し教授されることの端を開き、大学を真理探求の殿堂、精神的性格の指針とする道を開いたものである。こうした近代的大学の性格は、大学史上の第二のクライマックスであるベルリン大学において一層明らかにになった。ベルリン大学を典型とする近代的大学の特質は、1)研究および教授の自由が大学の一般的原則として承認を得るに至ったこと、2)教授および研究の方法は知識を伝達することから知識を生産することへと転換したこと、3)大学が科学研究の場となったこと、等の諸点に要約されよう。

こうした近代的大学の性格は、第三のクライマックスであるアメリカ的大学の創設に多大の影響を与えた。アメリカの大学は、ハーバード大学の設立 (1636年) を起源としてお

り、とりわけ、1860年代以後の発展は注目に値しよう。アメリカでは、1862年のモリル法の制定によってランド・グラント・カレッジとしての州立大学が発足し、実用的専門教育を大学が重視するようになった。そのことはアメリカの大学の近代化、大衆化に寄与するとともに、実用主義的大学を形成する基礎を開いたものといえよう。

他方、研究面においても注目に値するものがあつた。それは、ドイツ大学制度の下での研究所のアメリカにおける改良版である大学院（グラデュエイト・スクール）システムに象徴される科学研究中心の教育機関の設立であつた。

その後のアメリカの大学の変遷の中で、大学間や学者間の競争主義、学科目選択制度の導入、layman control を特色とする大学管理機構、ジュニア・カレッジ制度などはアメリカ的大学の創造に与えた影響が多大であつた。また、大学は広く社会に奉仕すべきであるというアメリカン・デモクラシーの立場から発した主張は、それまでの伝統的なヨーロッパ大陸の貴族主義的性格の大学を一步前進させたものであつたといえよう。

このような三つのタイプの大学制度は、当該時代の高等教育制度にとってのモデルとして、同一国内ばかりでなく、他国に対しても大きな影響を与えるものであつた。いわば、大学史上で、中世大学、19世紀ドイツ大学、アメリカ的大学は、「一時期の間、大学制度にとってのモデルとなる制度パラダイム」²⁾であつたといえよう。

こうした大学史上の転換点は、フランスの高等教育制度の変遷をふり返ってみても同様であつた。すなわち、中世におけるパリ大学の成立、19世紀への転換点におけるフランス革命による大学と学部の廃棄とナポレオンによるそれらの復活、19世紀末年の大学改革がそれであつた。フランスの以上の大学制度パラダイムの変換において、その重要な原理となるものは大学と学部との関係であつたといえよう。12世紀に成立したパリ大学は、その下位区分として、財政自主権、法人格を有する団体としての学部を擁した。しかし、14・15世紀以降それらは凋落の一途を辿ることになり、フランス革命議会によって廃止され、大学、学部という名称は消失した。革命政府は、旧大学、旧学部に代替するものとして専門学校制度を創設し、また今日のグラン・ゼコールの嚆矢であるエコール・ポリテクニク、エコール・ノルマルなどを成立させた。こうした革命期の教育制度は、ナポレオンによる帝国大学制度の創設によって一変する。いわば教育行政機構としての帝国大学制度の下で、高等教育を掌るのが学部であり、その名称が事実上復活することになった。しかし、帝国大学制度の下で復活した学部は、初等から高等教育までの教育機関、すべての教員を専管する帝国大学の一つの教育機関でしかずぎなくなり、また各学部の間には何のつながりもなく、一種の専門学校という様相に変質してしまうのである。

中世以来のフランスの高等教育制度、つまり学部は大学の構成要素であり、独自の自治権をもつ団体であるという観念はナポレオンにより破壊された。しかしこの19世紀以来の大学と学部との観念に対する批判は高まり、とりわけドイツの近代大学としてのベルリン大学での教育・研究の高場を目のあたりにし、大学が学部の集合体となるようなシステムへの転換が19世紀を通じて求められていった。だが、独自の法人格を有し、財政自主権を有する学部の連合体が大学と呼称されるようになるには、1896年の高等教育構成法の制定を待たねばならなかった。19世紀の末年に至って、再び高等教育機関としての大学、その

構成要素としての学部が復活することになるのである。

以下においては、中世から19世紀末にいたるまでのフランスの大学および学部の史的展開過程を、とりわけ、大学と学部との概念の変更と制度の変遷との関連に注目して明らかにしてゆきたいと考える。

I. 中世パリ大学の成立と学部

私は、遍歴する学者の若者
労苦と悲哀のために生まれ
いくたびか駆り立てられていくよ
貧困のために狂気へと。

文芸と知恵とを私は
今もお喜んで求めるであろう
もしもこんなにお金に困ることが
私をして学問をよさせないなら。

私の身を蔽うているこの破れた着物は
あまりにも薄くまた痛んでいる
たびたび私は寒さに悩む
忘れられた暖さの故に。

ある者はカルタをし、ある者は酒を呑み、
ある者は考えることをせずに生きている。
また酒盛をしている奴らのなかの
ある者は外套も上衣もはがれ、
ある者は美見な羽根の衣服を手に入れ、
ある者はすっからかんにさせられる、
ここには死の侵入を恐れる者などはいない。
皆なこぞって、われ劣らじと飲むばかり。

以上はゴリアルド族と呼ばれる遍歴する中世の学生たちの詩である³⁾。彼らは、人口の飛躍的な増大、商業の発展、都市の建設などが見られる12世紀という時代の社会的流動状態の中から生まれたものである。当時、12世紀ルネサンスと呼ばれるアラビアを経由したギリシア・ローマの古典文化の復活によりヨーロッパにおける知的関心は高揚し、学生たちは学問を求めてヨーロッパ各地から、たとえばパリ、あるいはボロニアといった当時の学問の中心地へと遍歴を続けていた。団体としての組合が成立する以前においては、彼らは異国の地で、生活上の不便、不利益を感じながら、いかなる機関にも所属しないで、またいかなる法的特権も享受することはできなかった。

こうした勉強のために遍歴する学生たちのために付与された最初の特権は、1158年に皇帝フリードリッヒ I 世によって与えられたものである。それは勅令ハビタ (Authenticum Habita) と呼ばれ、大学に関しての「最古の特許状」であるといわれている。この勅令ハビタは単なる特許状ではなく、皇帝法としてローマ法大全に挿入されたものであった。そのため、この特許状は普遍的な法規として位置づけられ、法律を学ぶ学生や大学の特権的な地位の法律上の根拠となり、一般的な意義をもちつつけてゆくことになる。

大学に関する最古の特許状である勅令ハビタは、主としてボロニアの周辺に集まる学生に対するものであった。しかし、本稿の考察対象であるパリ大学の前史にも同様の特許状を見い出すことが可能である。それは、以下に述べるフランス国王フィリップ＝オーギュストによって学生たちに与えられた特許状である。

少し長いが引用してみよう⁴⁾。

これからのパリの学生たちの安全に関して、朕はつぎのように命令する。

俗人によって学生が危害を受けているのを目撃したならば、正直にこのことを証言すべきであり、その行為をわざと見ないためにその場を立ち去ったりすることのないように全てのパリ市民たちは誓わねばならない。そして、もし正当防衛のため以外に学生を殴ったり、特にこん棒とか石とかの武器をもって学生に殴りかかった場合は、それを見たすべての俗人は、誠心誠意をもってその犯人あるいは犯人たちを逮捕して、朕の裁判官に引き渡すべきである。また、その行為を見たり、その犯人を捕えたり、その真実を証言したりするのがいやでその場を立ち去ることを禁止する。またその犯人が明白な罪で捕えられるか、あるいはそうでないとしても、学僧か、俗人か、あるいは法職に就いている人たちを通じて法律に基づいて十分な吟味を朕は加える。同様に、朕の伯爵および裁判官もそうすべきである。そしてもし、十分な吟味を加えた後に、朕または朕の裁判官が、その被疑者が有罪であると確信できたならば、その者がその行為を否認し、聞いによって自己の正当性を証明するとか、あるいは熱湯試罪法で自己の疑いを晴らすと言ったとしても、朕または朕の裁判官は、その罪の重さに準じてただちに、刑罰の執行を行なうべきである。また朕の市総監も裁判官たちも学生をいかなる違法においても逮捕してはならない。またその学生が逮捕されて当然である罪を犯したのでないならば、市総監あるいは裁判官は学生たちを投獄してはならない。そして逮捕されるに値する罪を犯した場合、朕の裁判官は、抵抗する場合以外は彼を絶対に殴らずに、彼をその場で捕えねばならない。そしてもし重大な罪が犯された場合、朕の裁判官はその学生の状態をみずから見に行くか、あるいはだれか他の者を見に行かせなければならない。(略)もし教会の裁判官が発見できず、すぐにその場に立ち会うことが不可能な時間に、学生たちが朕の市総監によって逮捕されたら、朕の市総監は、その被告人たちが教会付裁判官に委ねられるまで、虐待されずにどこか他の学生の家に彼らを保護する義務を負わねばならない。

この1200年の文書は、国王がパリの学生たちに与えた最初の特権を記したもので、今日この年を契機としてパリ大学の創設記念としている。この国王により与えられたパリ大学

に関わる最初の特許状が発布されたきっかけは、パリでの記録上の最初の「町（タウン）と大学（ガウン）」との騒動の勃発であった⁵⁾。その騒動は居酒屋でドイツ出身学生の侍僕がパリ市民に殴られたために起こった。報復のため学生の同郷の仲間がその居酒屋に押しかけ、その店の主人は重傷を負った。それに対して凶器をもった市民の団がパリ市総監を先頭にしてドイツ人学生の学寮を襲撃し、そこで乱闘が起これ、その結果数名の学生たちが殺害されたのである。そのため、パリの教師たちは国王に学生殺害に対する補償を訴え出た。国王はその教師たちの訴願に対して応じ、それが前述の特許状となって具体化されたのである。

この特許状によって学生たちの裁判権は、原則的には国王の代官であるパリ市総監の手を離れ、司教あるいは司教座聖堂付参事会の文書局長（*cancellarius*）の手に移った。そのことは、国王が学生たちに対して裁判上の特権を認可したことを意味するものであった。教師たちの訴えに対して国王が学生たちの特権を認めたのには、つぎの様な事情があったと考えられる。つまり、学生たちと教師たちは容易に都市を離れるという「移動の自由」を持っており、学生と教師が都市から離れて居なくなることは、都市の持つ知的・学問的威信の喪失、彼らから得ていた都市に対する経済的利益の損失という二重の不利益を意味した。彼らをパリに留まらせるためには国王は多くの譲歩をしなければならなかった。そのために、この特許状を発布し、学生たちの特権を認可したのである。

ただ、厳密に言えば、この1200年の国王フィリップの特許状が発布された時期には、大学の原初形態である団体としての *universitas* の成立は明らかではなく、おそらくこの特許状は、大学団体に対してというよりも、あくまでもパリに集まる個人としての学生を対象として特権を認可したものであったといえる。しかし、学問をするために当地での市民権ももたずに異国の地に留まる教師と学生にとって、生活上、学問上の不利益から自己を守るために相互扶助のための集団を形成するのは時間の問題であった。とりわけ、団体形成運動という当時蔓延した気運は、大学というギルド形成に多大の影響を与えた。

当時、ある職業で3名以上の者が集まることによって、相互の利益を保護するために団体を形成することが可能であった。それらの団体は、*corps*, *universitas*, *communitas*, *collegium*, *societas*, あるいは *consortium*, *schola* と呼称された⁶⁾。今日の大学の原初形態である *universitas* は、いろいろな職業ギルドの制度にならって成立したと考えられ、その *universitas* という言葉自体は、ある一つの団体・共同体あるいは組合を示すだけの言葉であり、たとえば、コミュニオン全体の団体（*universitas totius communie*）、ケルン市民の全体（*universitas civium Colonienium*）という具合にも使用されていた⁷⁾。

パリにおける共同体の最初の痕跡は、1207年の司教文書に見られる *communitas scholarium*（スコラリスたちの共同体）への言及である。とりわけ、1219年の勅書では、それまでの教師たちと学生たちとの共同体を表わす用語であった *communitas*, *communio*, *societas* に代って今日の大学の語源である *universitas* という語が最初に使用されることになる⁸⁾。また、この勅書で、現在、学部という語を示す *facultas* という名称もはじめて見出すことができる。1222年の教皇勅書になれば、*universitas magistrorum et scholarium*（教師たちと学生たちとの大学）という呼称もみられるようになった。以上の如く、13世

紀の前半期、とりわけ20年代以降、学生たちと教師たちの団体は専らuniversitasという用語を使用しはじめ、だんだんとuniversitasは教師たちと学生たちとの学問を媒介とするようなギルドを意味するようになり、今日にまで受け継がれることになってゆく。

このように今日の大学の原初形態は、中世の社会制度の根幹をなす職業組合の一形態であるuniversitasとして成立したものであり、それは、学問のための機関や場所を指しているのではなく、元来は多数の人々の集団を意味する知的ギルド、あるいは学問研究のための共同体として理解することができよう。それに対して、学校としての大学に相当するものとしてstudium generaleという概念があった。この言葉は、今日の大学という観念からすればuniversitasよりも近い中世の用語であり、studiumとは研究のために組織化された設備を擁する学校を示し、generaleとは教授される学科目の一般的かつ普遍的な性格やそこに含まれる多数の学生を意味するというよりは、あらゆる地方から学生たちを誘い寄せることから付けられた言葉であった⁹⁾。ただ15世紀になれば、この2つの言葉——universitasとstudium generale——の差異はほとんどなくなり、両者は同義語となり、studium generaleはuniversitasという用語に包含されてゆく。

さて、組合としてのuniversitasの内部には、ギルドとしての紐帯を成すものとして、学生の地方出身別集団であるナチオ（国民団）とともに学部（ファクultas：facultas）が形成された。ファクultasという語は、元来は付与された力、権威、特権などの意味をもつものであったが、前述したように1219年の教皇文書においてその語が使用されて以来、その語に大学での学問分野別集団という意味が付与され、大学内部で独自の自治権を持つ団体としてその地位を確立してゆく。パリ大学には4つの学部（ファクultas）があり、それは神学部、法学部、医学部、学芸学部であった。国民団とならんで学部は13世紀の間に大学の下位区分としての地位を確保してゆくのだが、とりわけこれら4つの学部がパリ大学を構成する構成要素としての役割を果たしていた。いわば学部というのは、「教える能力・資格（facultas）を持つ教師の集団であった。したがって学部は学生を含まなかったし、また神・法・医・教養といった、それぞれが独自性を持つ専門別の集団に他ならなかった。そしてその専門分野で教授し、学習結果に基づいて学位を認定し、学位取得者を仲間に加えるといった種々の権能（facultas）を持つ点で、学部は、他の専門集団に比べてかなり優位な地位にあったといえよう」¹⁰⁾。

学部という制度の具体的な形成過程については別の機会に検討していきたいが、ただここで確認しておきたいのは、フランス高等教育史上の最初の大学の成立時点においては、学部は大学を構成する重要な要素であったという点であろう。

II. フランス革命による大学と学部の廃棄

学部を構成要素とするパリ大学を中心とするフランスの大学は、15世紀を境として凋落の一途を辿った。前節で明らかにしたように大学はギルドとして成立し、そのギルドに対して特権を付与されることによって自主権を獲得し、内的制度を確立してきた。ただギルドの本質的性格の上からも、それは「すべての競争相手を排除する独占をむさばることを

目的としている。それゆえ、その独占権が確立され、不動の地位につくと、革新、変化する理由もなくなる。……自己の中に埋没し、社会と断絶関係を持つ」¹¹⁾ようになるものである。その原初形態がギルドであるがゆえに、やがて大学は閉鎖的となり、排他的、独占的な様相を呈する。その排他的、独善的性格のゆえに15世紀以降、パリを中心とするフランスの大学は、「それ自身では時代に適応できなくなり、新しい思想を受け容れるという許容性を失なって」¹²⁾しまい、アンシアン・レジーム下においては、その知的役割を大学外の教育・研究機関に譲ることになってしまった。こうした大学の退廃の状況について、フィリップ・アリエスは以下のように述べている。17世紀には、コレージュのクラスを終えた少年は、もう一度自分の職業を学ばなければならなかった。つまり今度は医者や弁護士について実践的にそれを学んだのである。というのも、大学にそれに関連する有名な学部が存在していた職業に関してさえ、教説よりは実践がすぐれていたからである。医学部、あるいは、とりわけ法学部には、ほとんど学生が通ってこなくなり、そこには、硬貨とひきかえに学位を授与する仕事しか残されていなかった。わずかに神学部だけが、この衰退を免れていた、と¹³⁾。18世紀に至ってもこうした状況は変化せずに、依然として学位の闇取引は続いていた。こうした大学・学部の荒廃の中でフランス革命を迎えることになる。

革命前夜には、フランスには22の大学が存在していた。それらの大学は、すべてが体系的な教育組織を有してはいなかったし、大学に適した法によって運営されているわけでもなかった。それらは、大学としての機能をもはや果たしてはいなかったし、世論の動きの埒外にあり、社会との接触をも避けていた。こうした大学に対する批判は数限りなく、民衆は国民的な教育制度の設立を希求し、既存の大学の抜本的な改革を望んでいた¹⁴⁾。フランス国民の批判的であった大学および学部は革命の勃発によって制度的廃止の対象となり、国家による管理の下に置かれることになるのであった。

フランス革命は、アンシアン・レジーム下の制度を打破することに大きな関心を寄せていた。とりわけ、中世以来の遺物であり、ギルド精神（同業組合精神）を体得する団体としての大学は、革命が打破せんとする対象であった。こうして、1793年9月15日に旧来の大学は廃止されることになる。パリ県は同年7月から8月にかけて教育計画案作成に専念した。しかし、その計画案は旧来の伝統を越えるものではなく、満足のゆくものではなかった。そのため、同県の公教育委員会は、国民公会の委員会と合同で、再度教育組織の計画に着手した。その結果、パリ県公教育委員会は、かつてのコンドルセの教育案に盛り込まれていた、中学校、アンスティチュ、リセという三つの教育階梯組織による教育計画案を作成した。その中で、旧前の大学に代る高等教育機関としてリセが構想されていた。同年9月15日、パリ県の代表は国民公会に出頭し、上記の三段階の上級教育階梯組織の設立を請願することになる。そのパリ県の請願書の第3条において、以下に示すような旧来の大学の廃止を求める条項が盛り込まれていた。

第3条：パリの県当局は、つぎのことが国民公会の公教育委員会の下で審議されることを要求する。すなわち、上記の教育階梯が、きたる11月1日までに設立されること、それによって共和国全土の現行のコレージュ、神学部、医学部、学芸学部、および法学部

が廃止されることを¹⁵⁾。

このパリ県の請願に対して賛否両論が議論されたが、ラカナルの全面的支持により全三条からなる教育法案は採択され、法令として公布されることになった。しかし、翌9月16日の国民公会が開催され、前日の決定に対する激しい反対論議が展開される。とりわけ六人委員会のクペは、前日の法案採択に際して最も強硬な反対意見を披瀝していたが、16日の国民公会においても強く法令の廃棄を求め、彼の意見に同意する声も高まっていった。こうして1793年9月15日付の法令を施行することは執行停止され、法的には旧来の大学は廃止されることはなくなった。アンシアン・レジーム下の大学は、その廃止を決定した法令が一旦執行を中止されることによって法的に存続しつづけることが可能となった。しかし法的にその存在が認められたとはいえ、大学での当時の教育・研究活動は沈滞しており、その消滅は、既成の事実であった。大学の学部、コレッジはもう4年も前から存在していなかった、という報告がなされていたほどであった¹⁶⁾。また、この法令が提出された以前においても、労働者のあらゆる結社を禁止したル・シャブリエ法が1791年7月に制定されており、中世以来のギルド精神によって維持されてきた同業組合である大学および学部はその法によって存続が困難になっていた。同時に、1793年3月には、大学付設のコレッジの財産が国有財産として没収され、大学は事実上は(de facto)存在していないのも同然であったが、あくまでも法令上(de droit)存続していたにすぎなかった¹⁷⁾。

大学の学部を廃止する1793年9月15日付の法令の執行停止により、名目上の存続が認められた大学は、1795年2月25日付の中央学校(Ecole centrale)を設置する法令、同年10月25日付のドヌー法と呼ばれる専門学校(Ecole spéciale)等の教育機関を設立するデクレによって法的にも消滅することになった。つまり、中央学校が従来のコレッジに、専門学校がそれまでの大学・学部 に代るものとして設立されたのである。

ドヌー法¹⁸⁾は、全教育段階を公教育として組織したフランスにおける最初の実定法であった。本法では、教育段階は、小学校、中央学校、専門学校、および国立アンスティテュに類別された。その中で専門学校というのが旧大学の学部に対応するものであった。同法の第3章において、共和国全土に、1°天文学、2°幾何学および機械学、3°博物学、4°医学、5°獣医学、6°農業経済、7°古代学、8°政治学、9°絵画、彫刻および建築、10°音楽のそれぞれの領域の専門学校が設置されることが規定されていた。旧来の大学・学部を廃棄して、以上の専門学校を設立したことは、その時期までの革命政府による二種類の高等教育機関の構想、つまり科学のためのécoles universellesの設立か、あるいは従来の学部の考え方による科学の応用のためのさまざまなécoles spécialesの設立かという二者択一の帰結であった¹⁹⁾。起草者ドヌーによれば、この専門学校は、とりわけ科学、技術、職業のための教育を施すものと考えられていた²⁰⁾。

こうした専門学校の組織は、1802年5月1日に制定された「公教育一般法」²¹⁾によって整備、拡充される。本法律の核心は、1795年創設の中央学校を廃止して、リセを新設することにあったが、専門学校についても、注目に値する改変がなされた。同法第3章第23条には、専門学校について、「教育の最終段階は専門学校においてなされ、それは完全で深い学

間研究と有用なる科学と芸術の完成から構成される」ものと規定され、同章第25条には、ドヌー法でその設置が見送られていた法学校を10校、現行の3校の医学校に加えて更に3校の医学校、4校の博物・物理学・化学の専門学校、2校の力学・化学の専門学校、高等数学の学校、地理学・歴史学・政治経済学の専門学校、絵画法の専門学校が設置されることが定められていた。

こうして、旧来の大学・学部は、ここに至って専門学校という新しい高等教育機関にとってかわられた。しかし、こうした革命期において創設され、徐々に整備、拡充されていった専門学校という制度も、つぎに考察するナポレオンの帝国大学法によって廃止され、また新たな教育機関にとってかわられることになる。

III. ナポレオンによる学部の復活

革命期の諸専門学校を中心とした高等教育機関は、ナポレオンの帝国大学制度の創設によって再編成される。この帝国大学制度下において学部が復活され、グラン・ゼコールとともに高等教育機関としての位置を確保することになった。しかし、ナポレオンによって復活された学部は、アンシアン・レジーム下のそれとは、まったく異なった様相を呈していた。

ナポレオンは一連の法令を制定して帝国大学 (Université impériale) を創設し、帝国大学による教育の独占を企図した。とりわけ4つの法令が帝国大学の根幹をなしていた。それらの法令とは、1806年5月10日付の「帝国大学の名の下での教員団の形成に関する法律」、1808年3月17日付の「大学組織に関するデクレ」、同年9月17日付の「帝国大学の規則に関するデクレ」、および1811年11月15日付の「大学体制に関するデクレ」の各法令であった。まず1806年5月の法律によって新しい教育体系の基本方針が示され、全144条からなる1808年3月デクレで、教員団、帝国大学の具体的組織が提示された。同年9月のデクレは、3月のデクレを補完する目的で発布され、1811年のデクレは、以上の既に制定された法令に根本的修正を加えるために発布されたものであった。こうした一連の法令によって創設されたのが帝国大学であったが、それは、帝国内の全教員、全教育機関を専管する一種の教育行政機構ともいえるものであった。そのことは、1806年5月の全3条からなる法律の第1条において、「帝国大学の名の下において、帝国全体の公共の教育 (enseignement) および訓育 (éducation) を専管される教員団体が形成される」²²⁾と規定されていることから明らかとなろう。大学という名称を冠しながらも、それは何ら高等教育機関としての大学を意味するものではなく、中世に成立し、フランス革命期に廃棄の対象となった大学とは大きくその観念を変えていた。

帝国大学制度の創設によって、帝国内はアカデミーと呼ばれる学区に分割された。各学区には、学部、リセ、コレージュ、アンスティテュション、パンション、プティ・ゼコールの6階梯の教育機関が所属することになった。このうち、「高等な学術と学位の授与を目的」とするのが学部であった。ナポレオンによって設置された学部は、旧大学の学部が4学部構成であったのに対して、神学部、法学部、医学部、理学部、文学部の5種の学部を

有することになった。

以下、1808年3月のデクレ²³⁾を基にして、各学部について具体的に明らかにしていこう。

神学部は、同デクレ第8条において規定されているように、首都大司教区の教会数と同数の学部が設置され、ストラスブールとジュネーブには改革派教会の神学部が設置されると規定された。その規定をうけて、神学部は合計12の学区に設置された。しかし、これらの神学部は、まったく新たに設立されたというよりも、共和暦12年ヴァントーズ23日（1804年3月14日）の「首都大司教神学校に関する法律」で設置された神学校をその母体とするものであった。共和暦12年の法律では、「首都大司教区ごとに、神学校と名付ける聖職志願者のための教育組織を設置する」²⁴⁾と定められ、これらの神学校が、帝国大学制度下において、共和暦10年ジェルミナル18日の「宗教組織に関する法律」²⁵⁾で規定されている大司教区と同数の神学校を母体とする神学部、および改革派教会の神学部として設置された。

法学部は、革命期の12の法学校によって形成されることが1808年デクレ第11条において明らかにされている。この法学校は、共和暦12年ヴァントーズ22日（1804年3月13日）の「法学校に関する法律」において規定され、同年補足日4日（1804年9月21日）のデクレ第1条において、法学校はパリ、ディジョン、ツラン、グルノーブル、エー、ツールーズ、ポアティエ、ランス、カーン、ブリュッセル、コブランツ、ストラスブールの各都市に設置されることが決定されたものである²⁶⁾。

以上の法学部と同様、医学部も既存の医学校という専門学校を母体として成立した。1808年デクレにおいて、医学部に関しては、「現存の医学校は、5校の医学部を形成し、それぞれの位置する学区に所属する。それらは、共和暦11年ヴァントーズ19日の法律に決められた組織を維持する」と定められた。上記デクレ中に示された5つの医学部は、共和暦3年フリメール14日の「3校の医療学校の設立に関するデクレ」と共和暦11年プレリアル20日の「医業規定に関する政府布令」で設立された5校の医師養成機関を基礎として設置されたものであった。前者、共和暦3年のデクレにおいては、「パリ、モンペリエ、ストラスブールに医療学校を設立する。上記3校は、病院、とくに軍病院で奉仕するための医療官を養成することをその目的とする」²⁷⁾と規定されていた。このデクレで設立された3校の医療学校は、共和暦10年（1802年）の公教育一般法において、法学校、博物に関する学校とともに専門学校の仲間入りをすることになった。ついで、共和暦11年プレリアル20日には、「医業規定に関する政府布令」が發布され、上述の3校の医学校に加えて、ツラン、マヤンスに2校の医学校が新たに設置されることが決定された²⁸⁾。こうして、革命期にその源流をもつ5校の医学校が、帝国大学制度下での医学部を形成することになったのである。

以上から明らかなように、神学部、法学部、医学部は、それぞれ革命期の首都大司教区の神学校、専門学校としての法学校、医学校を母体として設立されたものである。それらの学部は、各々、聖職者、法学者・弁護士・司法官、医師を養成する職業教育機関であった。学部は、「高等な学術と学位の授与」を目的として設立されたものであったが、実際には特定の職業、専門職のための準備機関としての専門学校の域を越えるものではなく、いわば職業的有用性のみを求められたものであったといえよう。

こうした職業的有用性を原理として設置された神学部、法学部、医学部に対して、理学

部、文学部はその趣きを異にしていた。1808年デクレにおいて、新設される両学部は、リセに付設され、他の教育機関、たとえばコレージュ・ド・フランス、自然史博物館、エコール・ポリテクニク、リセの教授の併任教員によって構成されることが規定された。いわば、両学部はリセの「延長」として、また「補完物」として性格規定されたのであった。そして、これら両学部に期待された機能というのは、リセ教員志願者のための学位授与機関、審査機関としての働きであった。両学部は主としてバカロレアと学士号との両学位を授与することができたが、リセの生徒たちは、大学入学資格としてのバカロレア取得のため、両学部の講義に出席し、将来教師を志望するものは、高度の学問に励むというよりは教授要目を教える方法を学ぶため両学部の講義に出席し、学士号を取得しようとした。ただ、学位取得のために毎日の講義に出席するというのではなく、学位授与を願う数日前に登録して学部学生としての地位を得るという場合も少なくなかった。しかし、とりわけ19世紀の前半期には、実際に授与された学位数はそれほど多くはなかった。

このため、理・文学部では、実際の教育・研究機能を果たしているというよりは、単なる試験機関としての役割の方が重要であった。ただ特筆すべきは、他の学部の学生が両学部とりわけ理學部の講義を聞きにきたり、それにも増して重要なことは、科学の諸相に精通したいと願って、一般の人々が両学部の講義を聴講するために出席していたという点であった。いわば両学部の講義は、登録学生のためというよりは、一般の人々のための公開講演としての役割の方が大であった。一般の人々を対象とする講演会の性格が強かったため、学問的レベルの高さは望めなかったが、学問に興味を持つ人々に知識を授けたという点では重大な貢献を成したといえよう。以下のエピソードは、そのことを証明する一つの資料である。

学位取得のために履修しなければならない学生達ばかりでなく、その中には著名な学者たちも含まれる他の多くの人々が、私の講義に出席しているのを見るたびに、私は喜びを禁じえない。そして、時には講義室が狭くて、聴講を願うすべての人が入室できないことがあった²⁹⁾。

以上のように、革命議会により廃止され、ナポレオンによって復活された諸学部は、アンシャン・レジーム下のそれとはまるで異なったものであった。そもそも、学部という言葉は、ラテン語の *facultas* という言葉に源を発していた。それは、13世紀の中世バリエ大学に関しての教皇文書において、はじめて今日我々が理解する意味で使用された。*facultas* というラテン語は、元来、付与された力、権威あるいは特権などの意味を持っていたが、13世紀以降、大学での学問分野別集団という意味が付与される。大学内部において、出身地域別集団であるナチオとともに独自の自治権を持つ団体として、その地位を確立していった。大学とともに学部は廃止されたが、再びナポレオンの帝国大学法の制定によって復活したとき、学部は高等教育機関としての大学の構成要素ではなくなっていた。それは、個々の学部間に何ら相互の関係をもたない、国家に有用な専門職業人を育てるだけの、教育行政機構としての帝国大学の一部でしかなくなっていた。

けれども、ナポレオンによってその概念を変えられた学部ではあるが、それらは革命期の専門学校を援用したものであり、新設された理・文学部は各学区のリセに付設され、併任教員が少なくなかった。神・法・医学部が専門職業人を養成することを目的としていたのに対して、理・文学部の根本的機能は、学位の授与という点にあり、教育は付属的補助的機能であった。そこでの講義は、学生に対してというよりも、一般の人々に対しての講演という性格が強かった。とりわけ、両学部のこうした傾向は、1870年代まで続くことになる。

IV. 大学の再生 —— 結語に代えて

ナポレオンの帝国大学法の制定によって、神学部、法学部、医学部は専門学校のようなものとなり、文学部、理学部はリセ教育の補完物となった。それらは中世以来の大学の学部が持っていた団体原理（法人格）をまったく払拭されていた。

19世紀のそれらの学部の状況についてみてみよう。学部は、特定の職業、とりわけ医師、法曹関係者、教員などになるための学位や資格証明書を付与する機関となり、各学部は他の学部からまったく独立していた。16の主要な町に学部があったが、特に医学部、神学部は、二、三の町にしか設置されず、すべての学部を擁した学区はほんの少数であった。ただ、ほとんどすべての学区には理学部と文学部は設置されていた。というのは、両学部は中等学校制度にとって必須のものであったからである。両学部は、学校教員に学位もしくは教員資格を与えるばかりでなく、バカロレアの審査にも加わった。旧制度下の学芸学部と中等教育との旧来の関係はこれのようにして保持され、文学部、理学部はリセで行われている教科目のほとんどの学位称号を与えた。バカロレアと学士号とのシラバスはほとんど同じであり、リセ生徒たちは、時に大学の講義に出席し、将来教師にならんとする者は、上級学問に励むというよりも、このシラバスを教える方法を学ぶことを要求された。こうした学部は、4人から6人の少数の教授で構成され、彼らですべての教科目をカバーしなければならなかった。その少数の教授も兼務教員が大変多かった。ある時期のポー学区の学区長(レクトゥール)は、学部の学部長、教授、そしてリセの校長を同時に務めていた。教員にも増して、学生数も大変少なかった。カーンの文学部には、ある時期42名の学生しか登録しておらず、そのうち22名はリセ生徒であり、残り20名は法学部学生であった。これらの学部での講義は一般大衆に開放され、概して引退後の余暇の多い人々を引きつけるものであった。比較的多数の学生を有した法学部でさえ、その教授たちは、講義によりも弁護士としての仕事に関心を払っていた³⁰⁾。

こうした学部の教育面での状況に対して、学問研究機能はどうであったろうか。1800年から1830年にかけてのフランスの科学は他国に較べて発展的であったとされている。ただ、その発展は、18世紀フランス啓蒙期の科学に対する強い支援とそれに対する熱狂の結果であり、いわば、フランス革命期の遺産がナポレオン期以降に開花したというベンデービッドの説³¹⁾、ラプラス、ペルトレといった偉大な科学者たちの個人的指導性によるものであるというフォックスの考え方³²⁾に代表されるように、ナポレオン以降の学部の研究機能と

は無縁であったともいえよう。19世紀の各国の高等教育を構成する共通点として以下の三点があったとされている³³⁾。1)専門化された科学と学問の基礎をもたなければならないこと、2)それは研究に結びつけられていなければならないこと、3)少なくとも教授たちは研究者としての資格があり、実績のある研究者であるべきこと、の三点であった。以上の要件は、ドイツの近代の大学、とりわけベルリン大学の原理から導き出されたものであり、各国の大学はこの原理にそって大学改革を行っていった。しかし、ただフランスだけは、以上の原理にはほど遠い、いわば「高等教育」の存在しない国であった。研究は、ほとんど無名であり、国家は学部の研究に対して予算をほとんど出さず、それゆえ、研究のための施設、設備も貧困であった。こうした研究施設の惨状をパストゥールはつぎのように述べた。

何日か前、二人のアカデミー会員が、現在、肺炎のために病床についている、あるすぐれた科学者について語り合っていた。「どうしろと言うのか、仕方がないではないか。実験室は科学者の墓場なのだ」と二人のうち一人が答えた。このように言ったのは、著名な生理学者で、その存在のためにフランスが全ヨーロッパからうらやまれているクロード・ベルナール氏であったが、彼もまた、自分の実験室にいたためにかかった長患いから、ようやく、奇跡的に回復したばかりなのであった。

ところで、これほど不健康で、湿度が高く、暗くて風通しの悪い実験室を有しているのはどういう施設なのだろうか？

それはフランスの最高の高等教育機関であり、その一身のうちに科学および文学の栄光を集約しようとしているかの如くに、祖国の名を冠している機関、すなわちコレージュ・ド・フランスである。(中略)

ソルボンヌの設備は少しはましだろうか？ 悲しいかな、そうではない。ソルボンヌにつくられた化学実験室は湿度の高い、暗い部屋で、サン・ジャック通りから一メートル以上も下にある。こっけいなことに、この実験室は《研究と完成の実験室》と称しているのである。この実験室で研究をしている、ある若い科学者——パリで最も卓越した教授の一人なのだが——が喘息で苦しんでいる。彼はどこで病気の原因を得たのだろうか？

(中略)

地方のファキルテがパリのそれと同じように恵まれていないということを付け加える必要があるだろうか。リヨン市はこの方面に何がしかの支出をしたばかりである。とはいえ、才能に恵まれた化学者であったビノー氏がリヨンのファキルテの実験室——文字どおりの地下室なのだが——の中で寿命を縮めてしまった、ということは学者仲間では公然の秘密である³⁴⁾。

こうしたパストゥールの言葉に代表されるように、学部での研究、とりわけ理学部での研究・実験は逆境のコンディションの下でなされていた。研究という活動自体が政府から理学部に対して与えられた制度的機能ではなく、そのため国家からの予算全体が少なく、研究のための予算を捻出することは大変困難であった。とりわけ、科学研究のために必須の実験設備、器具の欠如は相当なものであった。また、理学部の教員の採用に当たっても、

研究能力というものが公的に認められた採用基準となり得ていなかった。こうした科学研究に対する支援の欠如と、そこから派生する科学研究・実験の惨状に対する批判と学部改革の声が徐々に盛り上がり、高まっていく³⁵⁾。

こうした状況のなかで1863年に文相に就任するのがデュリュイであった。1830年代以降、文相の権限が拡大され、とりわけ第二帝政期以降は中央集権化が一層進められてゆき、学部の自主性はほとんど喪失され、政府のコントロールが強まっていた³⁶⁾。当時のフランスの科学者たちは、ドイツの研究中心型大学の成功とドイツ特有の *Wissenschaft* の理想を賞讃し、フランスにおいても研究が大学を基盤として行われることを強く望んだ³⁷⁾。こうした依然改革されない学部の特質が残存しているなかで登場してきたのがデュリュイであった。彼は大学人に理解されやすい大学改革の理念を提示した。とりわけ、それまでの中央集権を廃し、地方分権を推し進めていこうというのが彼の考え方の特徴であった。そのため、彼は、有機的に統合されていない孤立した学部の存在意義を説いたそれまでの文相とは対照的に、地方の学部を統合して大学を再建しようとした³⁸⁾。フランス科学の立ち遅れを克服するためには、学部が有機的に統一されている大学の再建が急務であると認識されるようになってきたのである。

デュリュイは、高等教育の膨大な統計調査の作成を促し、また一方ではドイツの大学制度に関する研究を奨励した。こうした調査報告を基にして、彼は、研究者を組織し、研究を促進するための *Ecole Pratique des Hautes Etudes* を学部とは別に新たに設立した。しかし、学部制度を改革することには断念を余儀なくされ、バカロレア審査と公開講演に明けくれ、貧困な予算と設備のため科学研究が遂行され得ない学部の現状を打破することは不可能であった。高等教育制度としての学部は何ら改善されることはなかった。しかし、デュリュイの大学での科学研究中心主義の理念と、孤立した学部を統一して大学を再建するという考え方は、1870年代以降の高等教育改革運動のなかに受け継がれ、19世紀末の大学改革につながっていった。

とりわけ、1870年普仏戦争におけるフランスの敗戦は、大学改革運動に大きな刺激を与えた。ドイツに勝利をもたらしたのはドイツ大学であったと宣言するフランス学者もいた。フランス人学者の集団は、コレージュ・ド・フランスに集まり、「フランスには高等教育は存在しない」と嘆いたりもした。彼らは、諸学部の孤立は、全体として知識を扱うことを不可能にしているとして、現状を批判した。

この時期、高等教育改革に多大の影響を与えた人物に、ルイ・リアールがいた。彼は、1884年から18年間、文部省高等教育局長の職にあり、真の意味での学部の再建に努めた。1878年に設立され、いわば大学改革のロビーとして機能した「高等教育協会」の運動とともに、彼は、数々の学部と大学との再建のためのキャンペーンを繰り広げた。彼のこうした運動の理念は、文相ジュール・フェリーによって具体化される。フェリー文相は、1883年、複数の学部を大学に連合させることの可否についてアンケート調査を行った。その調査結果によれば、回答した64学部のうち、大学再生に対して反対の立場——分離した学部の現状維持——にたったのは20の学部であった³⁹⁾。こうして、1885年、同じ都市の学部間の連絡を確保するため、*conseil général des facultés* が新しく設置され、共通の問題を討

議し、共通の予算を配分する機能がそこに付与された。また同年のデクレによって、学部
の法人格化が認可され、1889年、1890年の法令によって、学部の財政自主権が確保され、18
96年に至って「学部の連合体はこれを大学と呼称する」という高等教育構成法が制定され
るのである⁴⁰⁾。こうして、学部が連合され、その集合体が大学となり、高等教育機関として
の大学が復活したのである。

19世紀初頭以来、大学は学部の集合体ではあり得なくなった。そして、一世紀の間、活
性力を欠いた学部は、幾多の批判にさらされた。しかし、19世紀末になり、学部が大学の
構成要素となるという、フランスの大学の原初形態である中世大学の構造に再び戻ったわ
けであった。

注

- (1) C. H. ハスキンス著(青木靖三・三浦常司訳)『大学の起源』15頁。
- (2) 中山茂「高等教育研究のパラダイム」(広島大学大学教育研究センター『大学研究ノート』第57号, 1983年, 69-72頁)。なおパラダイムということばは、クーンによって提唱された科学史研究上の概念であり、「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与えるもの」として定義されている(T. クーン著(中山茂訳)『科学革命の構造』p.v.)。
- (3) 高坂正顕『大学の理念』1961年, 59-61頁より引用。
- (4) Cubberley, E.P., *Readings in the History of Education*, 1920, pp. 156-157. (前掲『大学の起源』154-155頁 所収の邦訳参照)。
- (5) Rashdall, H., *The Universities of Europe in the Middle Ages* (edited by Powicke and Emden), 1936, vol. I, pp. 294-295. (横尾壮英訳『大学の起源』上, 248-249頁)。
- (6) Post, G., Parisian Masters as a Corporation, *Speculum*, ix, 1934, pp. 422-423.
- (7) プラーニッツ著(鯖田豊之訳)『中世都市成立論』1940年、175頁。
- (8) 中世パリ大学の記録については、Denifle et Chatelain, *Chartularium Universitatis Parisiensis*, IV tomus, 1889. およびその一部が英訳されているThorndike, L., *University Records and Life in the Middle Ages*, 1944. を参照。
- (9) Cobban, A.B., *The Medieval Universities*, 1975, p.23.
- (10) 横尾壮英「ドイツにおける学部(Fakultät)の形成とその特色」(国立教育研究所『資料No.46-6 高等教育総合研究』1972年) 8 頁。
- (11) Durkheim, E., *L'évolution pédagogique en France*, 1938, p.191. (小関藤一郎訳『フランス教育思想史』上、329頁)。
- (12) Verger, J., The University of Paris at the End of the Hundred Years' War, *Baldwin & Goldthwait ed., Universities in Politics*, 1972, p.78.
- (13) フィリップ・アリエス著(中内敏夫・森田伸子訳)『<教育>の誕生』1983年, 206頁。
- (14) D'Irsay, S., *Histoire des universités françaises et étrangères*, tome II, 1935, pp.137-138.
- (15) Guillaume, M.J., *Procès-verbaux de Comité d'instruction publique de la Convention nationale*, tome II, 1894, p.413.
- (16) Ibid., p.438.
- (17) D'Irsay, op. cit., p.142.
- (18) ドヌー法の全文については、Beauchamp, A., *Recueil des lois et règlements sur l'enseignement supérieur, comprenant les décisions de la jurisprudence et les avis des conseil de l'instruction publique et de conseil d'état*, tome I, 1880, p.38ff. を参照。
- (19) Liard, L., *L'enseignement supérieur en France*, tome I, 1888, p.227.
- (20) Ibid., p.246.
- (21) Beauchamp, op. cit., p.84ff.
- (22) Ibid., p.156.
- (23) Ibid., p.171ff.
- (24) Ibid., p.141.
- (25) Ibid., p.173. note 1.
- (26) Ibid., p.142.
- (27) Ibid., p.29.

- (28) Ibid., p.109.
- (29) Willams, W., Science, Education and Napoleon I, *Isis*, no. 150, 1956, pp.374—375.
- (30) Zeldin, T., Higher Education in France, 1848—1940, *Journal of Contemporary History*, 6, 1967, pp.54—55.
- (31) Ben-David, The Rise and Decline of France as a Scientific Center, *Minerva*, vol. VIII, 1970, p.171.
- (32) Fox, R., Scientific Enterprise and the Patronage of Research in France 1800—70, *Minerva*, vol. XI, 1973, p.463.
- (33) ジョセフ・ベン＝デビッド(天城勲訳)『学問の府——原典としての英仏独米の大学——』40頁。
- (34) パストゥール(成定薫訳)「科学についての省察」(長野敬責任編集『科学の名著10パストゥール』1981年) 405—406頁。
- (35) Shinn, T., The French Science Faculty System, 1808—1914, *Historical Studies in the Physical Sciences*, vol. X, 1979, p.283.
- (36) Fox, R.& Weisz, G., The institutional basis of French science, *Fox, R.& Weisz, G., eds., The organisation of science and technology in France 1808—1914*, 1980, pp.13—14.
- (37) Fox, op. cit., p.443.
- (38) Weisz, G., *The Emergence of Modern Universities in France, 1863—1914*, 1983, p.36.
- (39) Ibid., p.138.
- (40) Beauchamp, op.cit., tome V, p.591.